

第2分科会 自主活動

子どもたちの自主的な活動と学習を、
どのように保障しているか

①分散会

—報告1—⑥

ここにいる会場のみなさんも差別のを知って
ください 差別をなくす仲間になってください
(滋賀県人教)

—主な質疑と討議—

石川 このレポートを読んでぜひこの場所に来たいと思ってやってきました。A自身がどうやって自分の立場を自覚したのか、お母さんがどのように話されたのか。

報告者 4年生の2学期に立場学習をしました。その時は部落差別という言葉と自分の立場が結びついていないと思いますが、狭山学習と識字の学習が転機になった気がします。地域の中に識字教室があって、そこでおばあちゃんに来てもらって、かるたとか紹介してくれる中で、一緒に学んで子が「うちのおばあちゃんあほやと思ってたけどちがったんや」と、差別によって字を奪われたんやってことに気づいて、部落差別と識字教室とつながったということと、石川さんの生き方が識字と結びついて、部落差別と自分の立場が結びついてということがあったと思う。もう一つ大きかったのが、自分のおかあちゃんが石川さんと一緒に写真に写るとか、文化祭で花をわたしていたとか、自分のおかあちゃんも子ども会に参加したという部分がAが自分の立場を結び付けたと思います。ただ、さっきも言いましたが、結婚差別の劇を目の前でずっと聞いてたAがいったい部落差別をどのようにとらえたのかということが聞いていないので、そういった立場学習だけではわからない地域でやっている活動とか地域のおばあちゃんの思いの中でちょっとずつ自分の立場に結びついたのもあるかと思っています。地域の中のネットワークにはものすごいものがあって、よく声をかけてもらっているんです。そんな中で生きていく中で彼女自身、うちの地域が大好きやうて言うてやるけど、これが高校ぐらいになってくると、ひとつ前のバス停で降りたいとか、社会にある部落差別のもどかしさとか現実とか、今は自分たちの地域を出せているけど、大きくなるにつれて地域名が言えなくなっていくこの悲しい部分とかその部分は本当に歯がゆいです。だからもっとうちの地域だけじゃなくて小学校でクラスを見ている、仲間づくりって言うてるけど、隣の子がどういう子かわ

からへん、もっとおたがいを知る活動が大事やと思う。うちの子ども会の活動を小学校のいろんな人権学習とか学級活動とか仲間づくりの活動に活かしていかなあかん、発信していかなあかんのかと考えています。

小学校4年生の2学期、先生が解放学習に出かけて行って、担任が子どもとの関係ができていくということで伝えます。地域の親もそこに来てもらいます。まず、何時間かにわけて、この社会の中にはいろんな差別がある、その中に部落差別があるということを伝える。なんでうちの地域に子ども会があるのかを伝えながら、うちの地域を差別する人がいる、うちの地域は差別をなくすために活動している、差別はする人が100%悪いんやし、こまったときはみんな守るよっていう、そんな感じです。

徳島 自分も20数年前に野洲小学校に勤めさせていただいて、いろいろと感じさせてもらった中で今があるのかなと思っています。そんな中で、地域の方に「小学校1年生であっても差別は待ってくれへんのか」と言われたことがありました。それが今のAのお母さんの話でも同じようなことがあるんだと、20数年たってまだそういう風にあるんだと聞かせてもらっているところもありました。立場宣言という話もありましたけど、卒業式の呼びかけでその中に「僕は地域で、小学校のみんなに差別をなくす小学校にしてほしい」と呼びかけのなかで聞いたり、僕も野洲小学校で地域の方に学ばせてもらった、変わっていったところがあって、小学校の中で、ほかの先生たちはどのように自主活動のなかで、どう思われていて、どう声に表れているのか聞いてみたいなと思いました。

報告者 今、子ども会を大事にしていこうということで、今はボランティアの形になっているのですが、当番を組みながら全員が関わろうという形でかかわっている。ただ、10何年前にくらべると子ども会のやり方等もふくめて少しずつ変わってきていると思います。ただ、ぶれてはならないのが、今、部落差別が現実ここにある、で、野洲小学校は部落差別をなくしていく教育を中心におくということで、昔はホームページにもしっかりとあったんですが、今はちょっととれてしまっています。ただ、目の前に部落差別が現実にあるなかで地域との関係を大事にしながらその取組をいろんな背景持っている、いろんなしんどい子にやっといこうとしているんですが、ちょっとずつなんかこう、一昔前に比べると同和教育に対する意識がちょっと後退しているのかなという気はしているので、もうちょっとしっかり伝えながらやっといかなあかんかなと思っています。ちょっとしんどい状況も正直あります。同和教育や人権教育を進めていくうえでの話なんです。

協力者 ホームページから部落差別をなくすという言葉がなくなったのはどうしてですか？

報告者 前の学校から来るときにホームページを見て、私にはこの学校しかない！とそこに希望を出して行ったのですが、なくなった訳は、すみません、ただ単にリニューアルされたのかわかりませんが、ただ地域の思いと一緒にやっついこうというのは教育の根底に据えてやっているはずです。

島根 私も解放子ども会で子どもたちと活動させてもらって4年が経ちました。その中で、島根県の西部のほうは、ごく少数点在型で、「地域」というものではなく、ご家庭ひとつが「部落だ」と言われています。立場学習というものは子ども会では行っていないのですが高校入学時に部落とは差別とは、ということ伝えていきます。先生は先ほど立場学習を繰り返していく中でAがいつか自分と重ねる日がくるのだといわれましたが、実際にAの気持ちの変化や不安、仲間とのつながりを教えていただけたらと思います。もう一つ、小林さんはいろいろな立場で、自身の立ち位置が変わりながら部落に長年関わってこられたと思います。見える角度や関わり方の角度などの変化についてお願いします。

報告者 まだ中学校2年生なのですが、小学校の時と比べると、直接結びつけてはいないのですが、人間関係のトラブルとかいろんな部分で部活とかで出てくる。やけど自分自身の立場がそのトラブルのっていう部分が、はっきりと思っていない、ちょっとわからないんですけども、でも高校ぐらいになって、なんかつきあう人には自分の出身のこと言わなあかんのかなっていう高校生がいてるということと言うと、なんかこう、彼女が自分は部落だといつも意識してないからわからんというその奥底の部分に不安であったりとか、ふとした時に出てくることはあるのかなと思います。直接自分がこの地域に生まれたからこうなんやということはまだ見えてない、まだ出さだけの関係になってないのかもしれないです。で、あと、今自分は学校にいて、学校のなかの仲間づくりとか、基本は訪宅は担当が行くより担任がいかんあかんと思っています。親も担任が行ったほうがうれしいやろなと思っています。担当は一步ひいて、担任が行きやすい環境を作るのがものすごく大事なかなと、やっぱり担任とその関係を作っていくかへんかったら、担当は親との関係切れても、まあしゃあないなと思うんですけど、担任と親との関係が切れてしまうと子どもが不幸になってしまうので、です。なので、なるべく担任にいてもらうようにと思っています。でもセンターにいと、地域に100%入れます。学校にいと、自分だけかもしれないけどしんどいです。働き方改革うんぬんって言いながら、でも訪宅うんぬんって言いながら、もうわけのわからん話になってきていて、「もう行けよ」って思うんですけども、夜の保護者とかの懇談も、働き方改革とかそんな一言で片づけるなと思っています。

けども、地域にいと100%楽でした。地域の声を学校に届けるのが役目やと思っています。その情報を地域に届けるのは担任に任せるので、地域の声を学校に届けるというのが役割ですけども、地域の声を100%伝えられるかっていうと、そこもしんどい部分はあるかもしれないですけど、地域から学校をみるのが担当の役割と思っています。

協力者 今、それぞれの立場でという話もありまして、私は去年からこの野洲市内の中学校に勤めさせてもらっていて、人権の担当をさせてもらっていてふと思ったのが少年団に所属している子が「担任の先生いてへんの？」ということをやっぱり聞いてくるんです。それは小学校でも中学校でもいっしょかなと思うので、担任の先生との関わりとか、役割分担という形で中学校でも考えていけたらなと思って聞かせていただきました。

愛媛 Aに小さいころから関わってこられて、子どもの24時間を見つめていくというのはとても大事なことだと思うんです。これは担当だから関わって、学級担任は時間外だから関われないというのはおかしいと思うんです。やはり子どもがどういう環境のなかで生活しているのかという生活背景まで見つめていく必要があると思うんです。そんななかで小林先生はAにかかわられていて、いわばこれからはAの土台として見届けたいけるんだろと思うんだけど、子ども会の活動のなかに中学校の先生の姿が見えにくいんです。もし中学校の方の取組とか、中学校の方で子ども会に関わっていく中でAの土台となっていく活動がもしあれば教えていただけたらと思います。

協力者 野洲市内には小学生を中心とした子ども会と少年団というのが中学校にあるんですけども、子ども会と少年団といっしょに活動している部分とかもありまして、名指しして申し訳ないんですけども少年団を過去に担当されていた方が今日来てくださっていますので話をふってもいいでしょうか？

滋賀 今お話にありましたように、私は野洲中学校の方で少年団の担当をしております。今、ご質問いただいた子ども会との関わりということですけども、私が来た5年前当初は少年団の子どもたち10人はいたと思うんですけども、今現在3人のしかも学年が集中してしまっていて、中学校2年生3人で活動しています。なかなか人数も少ないというところもあってかなり活動が厳しい状況にあるんですけども、今年度は小林先生と相談させていただいて子ども会と一緒にいろんなことをやっついこうとしています。たとえば、4月当初には開団式というのをやります。かつては別々にやっていたんですけども、今年はいっしょにやろうということで、子ども会の5、6年生の子らと少年団の中2の子らが司会とか運営とかもいっしょにやりました。また、先週の日曜日に

解放文化の集いというものがあつたんですけども、そこで模擬店をだすんですけども、今年はいっしょにやっついこうということでしました。なかなか子ども会活動に私たちがのぞきに行ったりという時間が難しいという面もあるんですけども、今年度はそうやっついっしょに協力してやっついこうという状況です。

—報告2—①

つながりは力となって～Aさんとの出会いの中で～

(徳島県人教)

—主な質疑と討議—

大阪 全体として温かい雰囲気のある学校なんだということを感じました。中学校にあがってくるまでの小学校との連携や小学校とのやりとりがあれば聞かせてください。

報告者 それぞれ小学校・中学校の人権教育主事が話し合いの場をもちまして、小学校ではどのような人権課題についてどのような資料を使って学習しているとかそれぞれ共通理解を図りまして、それを深めて広げていけるような資料や人権課題などを中学校では勉強できるようにしています。また、授業交流をすることで小学校ではこういう学びをしていて、ここまで人権について理解をしている、高まっているというところで連携を図っています。

石川 Aは小学校の時は在籍していてほとんど友だちとの関わりはなかったのに、どうして中学校では普通学級に行こうと思ったのか。また、どうして人権発表会で彼女が自分のことを語ろうと思ったのか、おうちの方も彼女が発達障害をもっているということがみんなにわかる、そのことをどういう風にして発表までしようと思われたのか、聞かせてください。

報告者 1年生の時の担任から、発表会までにどのような取組があつたのか話してもらいます。

1年時担任 小学校で支援学級に入っていたのですが普通学級に入りたいたいというのはAの方から強い思いがあつたと家庭訪問で聞きました。家庭での話し合いのなかで今までのように1対1で先生がお世話をしてくれるわけではないし、通常学級に入ったら困ったことが増えるかもしれないと保護者の人が伝えたんですけど、それでもAの中でみんなと一緒に学びたいという気持ちが強かつたので通常学級に入りました。発表に向けての取組なんですけど、入学式が終わった後に中学校生活の中でどんな友だちがいたらみんな楽しくやっついけるかなという中で、Aが書いたのは「自分のことをわかってくれる友だち」他の子の中に「けんかできる友だち」っていうのがあつてそれは本音で言い合うことができる友だちなんですけど、そういう友だちがいたら中学校3年間たのしく過ごしていけるといいました。はじめに自分に障害があるってことは言わなかつたんですけど、小学校の時に教室で窓からずっと外を眺めて友だちが楽しく遊んでいるのを見てさみし

かつた、5月の校内陸上大会で1500mの競技があるんですけど、それにAがみんなが嫌がる中、「私が走る」と言って、手をあげて走ってくれました。それにクラスのみんなや先輩たちがたくさん応援してくれた。で、走って帰ったらクラスのなかまがたくさん話しかけてくれて、その時までには特定の女の子としか話すことができなかつたけど、クラスのみんなといっしょに話すことができてすごくうれしかった。この人権作文を書いたときに「発表する？」と本人に聞いたのと、なんでこれを書こうと思ったのかを聞いたときに、なんで自分から急に話ができるようになったのかわからんけど、みんながいろんな声をかけてくれたりするから、今、わたしは2組の友だちが大好きやし、この教室がとっても楽しい。だから自分のことをわかってもらって自分の苦手なことも知ってもらいたいと決めました。保護者も本人がそういう気持ちならば発表させてくださいというので発表することになりました。

滋賀 質問したかつたことは前の人が質問したことと同じなんですけど、弱い立場の者が、たとえば障害があつたり、被差別部落の者であつたり、在日であつたり少数派の弱い立場の人がみんなの前で自分のことをしゃべるといのはすごく勇気のいることやし、こわいことじゃないかなと思うんです。いうことによつて余計に差別を受けたりするんじゃないかとか、そんな部分もあつてすごく勇気のいることだけれども、すごく自分をわかってほしいという気持ちが大きくなって力になっていったのかなと思っています。だから、こういう仲間やからしゃべることができる、このクラスの友だちやから自分の思いをわかってくれんちがうかなみたいな期待感であつたり、安心感であつたりすることが語るといことにつながっていくと違うかなと思っています。だから中学校に入ってすぐの段階でそういうことができたAの強さなり、思いがあつたりとか、小学校のなかで気づいてきた何かがあつたのかなというところで小学校との関係とかそういうのが聞きたいなと思つていました。やっぱりAの思いがこれから高校に行ったり、社会出たりしたときに自分のことを知らない人のところへ飛び込んでいかなければならないような状況になっていくと思うんです。そんななかでAがそこを乗り越えていけるだけの力であつたり仲間とのつながりであつたり、Aの強さになっていけるようにそこを期待したいなと思うのと、まわりがお互いにつながりあつて支えていけるような仲間が進んでいってほしいなと思つていました。

滋賀 人権委員会は生徒会で必ず各クラス何名という形でやっておられるのか、それとも希望する人が自由に入れるのか、ということと、だいたい人数はどのくらいおられるのかということが知りたかつたのですが、うちの人権研究会というのは部活動でもあり、生徒会の委員会でもあり、

かねて入ることができるという活動になっていて、今は10人ぐらいになっていて、少ないときは2人とかそんなことで活動していたのですが、先ほど聞かせていただいた人権委員会ではいろんな活動をされているのすごく興味をもたせてもらって、どういう風にはたらきかけとかしておられるのかと知りたかったので質問させていただきました。

報告者 本校の人権委員会ですが、生徒会の専門委員会の中に位置づけられています。それぞれいくつか委員会があるんですが、人権委員会は各クラス2名ないし3名、本校は1、3年生の人数がそんなに多くありませんので。2年生は多いので3名ないし4名で希望を募っています。人権委員の人数は34、5名ぐらい。今、私の教室で毎月人権委員会の話し合いを行っているんですが、教室と同じぐらいの人数なので34、5名で活動しています。で、3年生になると伝統のように引き継がれているんですが、人権劇を担当します。この数年間は舞台のうえで劇をするというのではなくて、脚本を私と相談して決めて、夏休み中に撮影してそれをみんなに見てもらおうという映像劇をしていたのですが、今年度はレポートにもあるように私の方から企画を出させてもらいました。いやだという生徒もおらず、すんなりと3年生も協力して、そのなかでいっしょに活動できたのが、3年の人権委員の成長につながったのかなと思っています。それ以外の活動では人権新聞をつくったり、写真にもあったんですが掲示を行ったり、あと人権委員はクラスの雰囲気が悪かったりしたときは手をあげてクラスの雰囲気がよくなるように働きかけていくっていう大事な役割があるからねっていう風に常々話しています。人権意識の涵養にむけて働きかけるような役割を担ってもらおうように思っているんですが、なかなかしっかりと声掛けできている子もいれば、声なき声を届けているような子もいるのが現実です。

大阪 報告を聞かせていただいて、すごく中学校全体でぼくの中学校にはないような組織での取組をされていて、すごく人権に対して取り組まれているなと感じました。一方で先生の学校の課題として人権意識をなかなか自分のこととしてとらえられない、他人事としてとらえてしまうっていう課題があがっていて、すばらしい取組をされているなかで、こういうアンケートの結果になっている差というか溝となっている原因は何なのかなというのと、もし、もっと自分事としてもっととらえられるようにするための取組を今後されるのであればどういう取組をされるのかということをお聞きしたいです。

報告者 先ほど映像で人権発表の様子を見ていただいたんですが、この取組にいたったのはなかなか人権問題を自分のこととしてとらえられていないという生徒がいるということがアンケー

ト結果で出ましたので、毎年年間計画を立てて人権学習をしているのですが、どこか知識がそれぞれ結びついていなかったりするような印象があってとらえられていないのかなという思いがあって、どうしたら知識だけじゃなく人権意識を自分のものとしてとらえられるだろうかというので教師集団で考えたときに、やっぱりそれを結びつける一つのきっかけがいるのではないかと、1年生でも同じようにステージ発表をしたのですがそのなかで生徒たちが今まで学んできたことを再確認して結びつける。そして、自分たちが知識を、こう自分の日々の生活の糧になるように、なんとか自分たちのものだっていうことでステージ発表を昨年度行い、今年度も先ほど見ていただいたように2年生で行いました。この2年間を見たときに、少しは自分のこととしてとらえられるようになったのかなというのを人権教育主事として思っています。なかなか急には生徒を変えていくのは難しいのですが、こういう取組をしているなかで少しずつ自分のこととしていけたらと思います。Aのことにしても勇気を出して発表してくれたAのことを思うとなかなか他人事には思えないっていうのも感じ取っていく中で本校の課題であるもっと人権問題を自分のこととしてとらえられるような生徒を積極的に育成したいと思っています。今回のこの学習発表の取組も、その課題解決のためにひとつ手段となるのかなということで取り組みました。教職員がしっかりと話し合って相談して課題を解決してけるような取組をさらに続けていけたらと考えています。

大阪 子どもたちがAの姿を見てやっぱり安心して自分は思っていて、それって子どもたちが人権の取組をうけてなにげなく安心の場をつくっているのかなと自分は感じました。自然に相手の、その弱者になるといわれている人たちのことも大切に認め合えてる、そういう集団ができていないかと思ったのですが、アンケートの結果も、何気なくできているからこそ、自分たちが人権を大切にしている取組が何ができているのだからって気づけてないだけなのかなって感じで自分はそういう見方もあるのかなと考えた。で、やっぱり人権を大切にしているって意識していることが、これから将来、人権を大切にしていけない場に出会ったときにどうするかっていうところに立ち戻ったり考えたりするっていうことができるのかなと考えて、先ほどの質問とかを聞いてました。

大阪 お話を聞いていて、最初Aが普通の人より苦手なことがあるとか、みんなより少し苦手なことが多いっていうのを言っているのを聞いて、普通って何なんだろう、みんなって何なんだろうと思って聞かせていただきました。その中で、話を聞いているうちに、きっといろんな人が世の中にいて、自分もそうだけど、いろんな違いって言う

のは間違いじゃなくて豊かさなんだよってことを伝えたいのかなと思いました。その中で、自分自身思ったのは、今ある社会を生きていく力をつけるのではなくて、今ある社会を変えていく力を子どもたちにつけていかなあかなということをしごく思いました。で、質問なんですけれど、Aが発表をしたあとに、多くの生徒の心をうったということがありましたが、先生がたくさんの生徒を見ていて、どこからそう思ったのかな、そのあと、子どもたちはどんな反応をしたり、どんな行動になったのかというような具体的なエピソードを教えていただければと思いました。それともうひとつ、自分のことをわかってくれるクラスの仲間がいたとAは言っていたんですけど、まわりはいったいどんな声掛けをしていたのかなと思いました。

報告者 1年の担任より報告させていただきます。

1年時担任 まず、Aの作文を発表するにあたって、クラスの方で一度発表しました。その時の生徒の感想のなかで「今までいっしょに過ごしてきた、障害があるということは全然わからなかった。見た目ではあわからないことを自分たちに伝えてくれたAはすごいと思う。自分なら隠していたと思う」という感想がありました。そのほかにも発表をきいて4月の一番初めに声をかけた生徒は「障害があってもAさんはAさんだ。障害があると発表してくれたからといって特別扱いはしたくない。自分も苦手なことはあるけどみんなが支えてくれるから、自分の苦手な部分がプラスの方向に働いていってる。せっかく自分のことを話してくれたから自分にできることAさんにしていきたい」という感想がありました。その感想だけじゃなくて実際にAは雷の音がきらいで、小さな雷の音でもすぐに反応して耳をふさぐ場面があるのですが、たまたま帰りの会をしている途中で雷が鳴ったことがありました。そのときに普段はやんちゃな男子生徒たちが、こちらは何も言っていないのですが、先に窓閉めようぜと言って、少しでも雷の音が聞こえないようにしてくれました。で、帰りの会が終わって話を聞いたら「この前、Aさんは雷の音が苦手やといったから窓を閉めただけ」と言っていました。Aの発表が生徒の心に届いて自分たちを信じて発表してくれたということがあったので、そういうことを自然に行動に移せるようになったのかと思います。

徳島 阿波中の学年主任をしています。去年から切磋琢磨という目標を掲げて互いに競い合って伸びていこう、そして人間関係を築ける仲間づくりを進めています。で、先ほどいろんな質問のなかにアンケートの話が出ましたが、価値観の違いがあると思います。本当に生徒たちはまじめなんです。私たちからみてできていると思うことも、できていないのでは、と疑問をもちながら生活してくれています。アンケートについては学年の温度差も多少あります。私たちの学年で特徴的な

のはクラスで足並みをそろえながら学習するんですけど、あわせて学年の全体学習の二本立てでいっております。去年も同じですが今年もそれで行きます。クラス指導、学年全体指導、これをコラボしながらしております。今週は学年全体学習をしています。去年、入学してきた生徒が自閉症、アスペルガー症候群だといったときに、これは責任とらないかんと思いました。それで発達障害のことを学年全体で勉強しました。あとは文化祭で毎年ステージ発表をしています。その年の全体の振り返り、浸透させ、繰り返し繰り返しというねらいもあります。毎年9月に学年は全員を使って文化祭の発表をしております。Aが去年も作文を発表しました。で、去年の生徒たちは知っているんですけど、今年入学してきた新1年生は知らないで、今年の文化祭でももう一度いれました。昨年、発表するのが苦手な生徒なのでかなり発表するトレーニングを放課後やりました。とにかく、恥をかかせてはいけない、発表をしたり、受け止めたり両方の指導がいるかなと思いました。

一日めまとめ

協力者 1日めのまとめをしたいと思います。最初の滋賀の小林さんの報告から多くのことを学んだと思います。自分は部落のことをよくわかっているんで、上からしゃべって、自分は上からしゃべっているつもりはなかったと思うんですけど、ムラのおかあさんから「あなたにはうちの子めんどろみみてほしくない、担任になってほしくない」と厳しい、けどあったかいものを受けて、自分に何が足りないのかということを考え始めたと思うんですね。ずっと今日の質問を聞いていてどうしても気になるのは、部落差別の話をしているのだと思うんですね。授業でも生徒にもAにも部落差別の話をしているんだけど、部落のことをどういう風に語っているのかなということがどうしても出てこなくて、Aは部落のことをどう思っていて、Aのお母さんは部落のことをどう思っていて、もちろん差別はやってくるので、そこに負けない子にはしてほしいと思っているんだけど、ムラのおかあさんたちが今一つどこかで不安になってしまうのは、やっぱり小林さんがムラをどう見ている、どう感じているのかっていうのもっとはっきり伝えてもらいたいなっていう風に思いました。でも、しごくすっきりしているところもあって、自分が面倒をみなくてもつなげることが大事なんだという風におっしゃるといことはかなりこれまで何度もこえてないと、それはなかなか言えなくて。Aが会館であったおねえさんのことをしごく大切に思って、それをコーディネートすることが自分の仕事なんだとおっしゃることとか、地域にこども食堂の場所と話せる仲間をつくるのが自分の仕事なんだと言い切っている小林さんはすごいなと思います。

ただ、明日もう少し宿題もあるかなっていう風

に思うので、小林さんがどういう風にムラを思って今までやってきてるのかって話をやっぱり聞きたいなと思って。

この中学校がすごい実践をしているなという風に、読んでいて思いました。一番大事なことは一年生の担任が答える、とか、学年主任が答える。明日は村上さんがどの質問にもきっちり答えてもらおうと思っています。家庭訪問で「みんなといっしょに学びたい」と、僕はてっきり保護者がかなり鍛えていて、中学校から通常学級に行けという風に言ってるんだらうと思ってたのですね。でも、そうじゃないんだと。どちらかという、若干、大丈夫？という風に言っていた。けど、Aが小学校の時、窓から見ていて、さびしかったんだ、ということ僕らがどう受け止めて、そこにどうやって返していくのかっていうことだと思っただけです。大変、いい中学校で、安心、安全ってすごくいいことだと思っただけです。だから生徒はすごく育ってて、今日質問に出てこなかったの…、やっぱりBが気になってしょうがないんです。Aがすごく変化して、学校に鍛えてもらいながら育って…で、Bが、仲の良い友だちに自分は「ひとりっこ」っていうんですよね。存在を消していた。けど、その子がAによって「自分には妹がいるんだ」という場面があるんですよね。で、そこに村上さんはどう関わっているのかということをやっぱり言ってほしい。その子を鍛えないと、先ほどフロアから出ましたけど、この子が高校に入って厳しい場面があったときに「中学校はよかった」じゃだめだと思っただけです。高校に入ったときに、僕はいつも先輩の先生たちに「差別に会うのは一人だ。だから鍛えなきゃいけない。自分のつらい思いを言う仲間は必要なんだけど、差別に会うときはつねに一人なんだ。だから鍛えなきゃいけないんだ」という風にいつも僕は怒られていてきました。

今日、二人の報告を聞いてもう一つだけ気になっていたのは、「君はたしかに生徒が好きで、いろいろ関わっていっしょに24時間楽しくやってるのかもしれないけど、おまえは魂の世話をしているって思うか？その魂の世話をしなきゃいけないんだ」という風にずっと問われていて。もう一度実践を振り返ってみて、一番しんどい時にその子が連絡してくるのかなって。一番困ったときにわたしたちに助けを求めてくるのかなって。そういう質をぼくらが維持できているのかっていうことが自主活動で問われているのかなと思っただけです。ぜひ、明日は濃く、しつこく、もっと丁寧に行きたいと思っただけです。ぜひ明日も参加していただいて、滋賀大会でおたがいの整理をしていきたいなと思っただけです。

2日め

三重 松原高校の産業社会と人間は私たちも近いところにあるので以前も参観させてもらったと

きも2、3回あるんですけども、社会に一番近い高校生だからこそ、こういういろんな学びをしているんだと思っただけです。

先生おっしゃっていただいたようにインターネットしらべたら、正しくない情報がいっぱい出てくるし、街頭アンケートでいい人もいればきつい声もある。そうすると、間違っただけのイメージを焼き付けてしまいそうなおとこ、先ほど聞かせてもらっていたら自分の生活とか、仲間の生活とかにつなげてくれるようなプロセス踏んでいるし、それで生活保護の受給者とかケースワーカーに会ったりとかその後の子ども食堂につなげてもらったりとか、まさにタイトル通り葛藤させたり主体的な学びをしていただいているような状況があって、社会問題にしても部落問題にしても無関心でいられへん生徒のハートまで育ててくれるんやなと思っただけです。先生が途中で自分にも迷いがあったとか先輩の先生に聞いたってあたりで、こんなにも子どもが自分で葛藤し、考え、動いていくような学習活動をつくるのに先生方がいっしょに学ぶ姿勢があったり、それでも指導者やから先回りして見守ったたりとか、先生方どうしてどんな話とかか作戦会議をしてはるかなってあたりをもうちょっと詳しく教えてもらえたら。たとえばインターネットのことをとっても、子どもたちの実践に任せてますからとか言って、間違っただけのまま発表させたりしてる学校とかあったりするじゃないですか？それが、なぜここまで言っているのかって先生方のエピソードを聞かせてもらえたら。

報告者 そうですね、やっぱり語っていくつうときに、僕自身も10年ぐらい教員をしていて、ムラ出身の子であったりとか、在日の子たちが立場宣言をしていくときに立ち会ったことは何度もあったんです。で、初めて自分の生活を語っているのは、僕自身も初めてやったので、僕自身迷いがでてきたんですけど、やっぱり最後は部落問題のこととか在日のこと生活保護のことと同じやなっていうか、その子たちが自分で語ろうとすることをきちんと僕らが支えてそのことを聞いている子たちが受け止められるような環境を作っていくことがすごく大事やなと思っただけです。やっぱり教員同士が話をするとき、いろんな場面で生徒たちが語るのですが、語った後にそれをそのままにしないとか、「みんなどう思う、そのことを」というか、たとえば、立場違うけども自分の痛みとかと重なるとことかあるんちゃうかなと気づかせていくとか、そういうことを大切にしようということ教員のなかでもすごく大事にしてるかなと思っただけです。

愛媛 わたくしの勤務しております学校でも総合学科が設置されておまして、産社の授業や課題研究をしておるんですけども、一点お伺いしたいのですが、産社のテーマを決めるときにクラスごとに決めてらっしゃるといことなんですけども、

先生方がそのクラスで決めているのかということ、もう一点はテーマを決められてからの生徒さんの取り組み方とか先生方の工夫以上に生徒さんたちが非常に主体的に動かれているという印象を受けたので、帰ってから本校でも活かしていけたらなと思いました。

報告者 ジャンルっていうものがあるって、最終的に生徒たちが発表していく中で自分たちのグループのテーマを決めていくっていう形です。産社の場合で言うとライツジャンルっていうものがあるって、それ以外にもこの年には障害のことをやるでこぼこジャンルってものがあったり多文化共生のジャンルがあったりとか、ジェンダーのことをやるジャンルとか本当にクラスばらばらで自分が学んでみたいものを選択していきます。ジャンルでの学びをした後に自分たちで発表をつくっていくんですけども、自分たちでテーマを立てていくんですがライツというジャンルの場合は自分たちが学んできたこと、たとえば世界人権宣言、子どもの権利条約のこととか、労働基準法のこととか、ユニオンのこととかそういったことをいくつか振り返るように並べていてそのなか生活保護のことも入っていました。その中で生徒たちが自分たちが発表の中でつたえていくことを決めてもらう流れになっています。

大阪 発表を聞かせていただいてすばらしい取組だなんて思うことがたくさんあったんですが、私自身特に感銘を受けたのはグループ別の発表で生活保護のことを話している子がいて終わったあとに違うグループの子が泣き崩れたというところで、自分たちはその問題に真剣に向き合っていなかったということで、そう思える子どもたちがすごいなと思いました。うちの中学校でいうと、半分はムラの子たちなんです。あと、外国にルーツのある子や生活保護の子もたくさんいますし、となってくるとね、中学校の中でも自分たちの立場もよくわかっています。そのなかでお互いのことを語ったりはできるんです、ただ高校にいったりまわりとの違いとか気にするのは高校からなんです。特に中学3年なんかは語りに戻ってきてくれるんですけど、先輩たちが涙を流しながら自分たちのつらい思いを語ったときに子どもたちはすごくやっぱり揺さぶられるとか不安な気持ちにもなるんです。で、松高の取組を聞いていて、松高に入学してくる子たちもみんながみんな人権教育を受けてきて意識の高い子たちばかりではないと思うんです。難しさを入学当初、どういう風に語っているかなど聞かせていただいたら中学校の教員として安心できますし、ほかの高校にももっと広めてほしいなと思うんですが、そのあたりのことを教えていただいたらと思います。

報告者 だいたい中学校60校ぐらいの中学校から集まってくるのでいろんな学びを経て、いろんな地域性もありますし、いろんな子が集まっ

てくる学校なんで、先生のおっしゃるとおりなんですけども、なんでAがこのことをみんなの前で言えたんかという、ひとつは先輩の発表と部落問題学習という話もさせてもらったんですけど、もう一個、一番うちの学校で外されへんと思うのが入学してすぐにいわゆるオリエンテーション合宿、ホームルーム合宿と本校では呼んでいるんですが二泊三日で入学して一週間、十日経たないうちに行くんです。二日目の夜にですね、クラスミーティングというのをしています。そこで、円になって今まで15年間生きてきた人生を振り返って今まで乗り越えてきた経験であるとか自分が誰かに支えられた経験とかを共有するクラスミーティングの場をもっています。そこでは、もちろん教員自身も自分の経験を話します。そのうえで、クラスのそれぞれが自分の立場のことを話してくれたりとか、いわゆる立場がなかったとしても自分の家が一人親でなかなかおかあちゃんとかかわりがうまくいかなかった話であるとか、自分が中学校時代いじめられた経験があるということ語ってくれるんです。それはどの地域からきたとかじゃなくて、みんな語りやります。で、その中で一番最後にみんなが今日話してくれたことを自分の痛みや弱さと重ね合わせて高校生活をスタートしようって、もしなんかあったときはここに帰って来ようって確認をしています。なので、先ほどもAが言えたっていうのは一番最初の合宿が大きいんじゃないかなって思っています。

滋賀 小学生相手に進めているんですが、自分の反省として思いが高まってくるとその分、目の前にしてる子どもたちになかなか見えないっていう現状があって日々反省をしているんですが、今回子どもたちの主体性があるってとてもすばらしい発表だなと思いました。一つ質問ですが、その子が自分のことを話すということはとても効果的である一方、危険な面もあるかなっていう風に思います。Aが話をするときに家庭状況、保護者であったりまわりであったりアプローチが必要かなと思います。あと、交流を行った後、肯定的に受け止める子もいれば、中にはさまざまな考え方もあるのでいろんな子どもたちの否定的な意見が出たときに先生がどのような想定で返そうとされていたのかということも聞かせていただけたらと思います。

報告者 Aのことでいくと、最後なかなか原稿みせてくれなかったんですけど、本人が言おうとしていることはなんとなく僕自身もわかっていたので本人と話をしながら、おかちゃんに話すかって話していました。Aは言おうと思ってるねんと言ってました。もう一人、Bの方は保護者には言っていないんです。Bの両親は両方とも精神障害をおもちで、Bが小さいときにBの兄が虐待を受けているところを見ていて、なかなか自分の家であることを話すというのは、特におとうちゃんには

言えないっていうのがあったので、ちょっとそのあたりは本人とも家のことを含めてしてきて、やっぱりおうちの人に言われへんけどみんなには伝えたいんやって語ってくれやったんで、そこは本人の気持ちを尊重しました。ネガティブな反応が出たときなんですけど、実際そういう反応がなかったのは事実なんですけど、感想文やふりかえり見ても本当に肯定的に受け止める子が多いなと思ってます。もし、それが出たときはとことんその子と話すかなっていう、やっぱりその子がそういう出し方をするっていうことが、たぶんその子にも何かあるのだろうなっていうか、そこに気づけてなかった自分を反省するっていうか、いかにその子と向き合って話をしていくかなと、今考えるとそう思います。

大阪 先生の報告を今年の夏のセミナーでも聞かせていただいて、その時は動画も見せていただいて、その姿が本当に鮮明に焼き付いていまして、どうやったらこんな子を育てられるんやろうって真剣に考えさせてもらうきっかけになって、今日も聞かせていただいて本当に感動しました。

一番最初に質問された方とも関連するのですが、松高の教職員のシステムとかどういう風に入権感覚であったりとかを学ばれる、引き継いでいくようなものがあったり、先生自身が松高で学んだことであったりとか、大事なものを引き継いでいく教職員の関係を聞きたいのが一点と、報告の中でも子どもたちが声をあげる主体であることをゴールにされていたということで、本当にこのこと自体がすばらしいけど、本当にどこまでのゴールを想定して取組を進めてこられたのか子どもたちの自主活動の中で広がっていったこともたくさんあったかと思うんですけど、たとえばケースワーカーのことも設定されていたのかもしれないけどどういう風に入組の中で修正しながら進めてこられたのか、どの程度の想定があったのかなということが2点めと、先生が子どもの背景をたくさんとらえている中で保護者との連携はどのように取られていたのかな、子どもが自分のことを語るっていうときにどのていど保護者となつながっておられたのが3点め。4点めは先ほどとも似てるんですけども、いろんな子どもたちがいろんな育ちの中で来ると思うんですけども、僕たち中学校の教員に高校の先生から見てこういう力を高校までにつけてほしいとか、こういう力が高校で自主活動につながっていくとかいうところを教えていただけたら、小中学校でかかわる私たちにとっても非常に学びになるというかこういう視点でこういう力をつけてくれたら子どもたちは育つというアドバイスをいただけたらと思います。

報告者 一つは松原高校で生徒が問われる場面ってめちゃくちゃあるんです。で、それと同じぐらい教員が問われることも実は多くて、クラスミーティングでも自分のことを語っていく場面が

あるので、そんなことを学生時代にしたことのない教員もいるので、そこで初めて自分のことが問われるってことがすごく大きいかと思います。もうひとつは同業制が多いかなと思います。うちの高校は複数担任制でのほとんどの教員が担任をしています。いま、ぼくも3人で担任をしているんですけどもめっちゃ職員室で話をします。なので、一人の教員がひとりの生徒のしんどさと寄り添ったり悩んだりしていることをやっぱりほかの教員にぶつけて話したりすることを、3学年とも職員室で話がされてるのはすごく強みというか外せない部分かなと思います。

2つめが、どの程度のゴールを決めているかということですが、自分は英語科の教員ですが、どちらかといえば社会科のようなことをまったく知識がないなかで本を読ませてもらったりとか、実際に誰かに出会いに行くように言う場面が多いので、自分も出会いにいなあかなと思います。実際にブラックバイトのこととかをとりあげて映画をつくってはる映画監督の方に会いに行ったりとか、そういったことをしていました。やっぱり生徒といっしょに考えていくとか、このときもケースワーカーの人と会うことを最初から考えていたわけではなくて、生徒たちが行き詰ってしまったんですよ。みんなの意識変えたねん、自己責任じゃないってことはなんとなくわかってんけど、この先どうしていいかってなるときに発表の準備が進まへん時期があったんです。これも、先輩の先生から言われたんですけど、煮詰まったときは誰かに会いに行くのは大きいって言われていたので、その中でケースワーカーの人を紹介して今回は学びが深くなったかなって思います。生徒たちの熱量に合わせて考えていくっていうのが大事なかなと思います。

3つめは保護者との連携については先ほどとも答えさせてもらったんですけど、できるかぎりBの場合は連絡をとってほしくないってことだったので、なかなか直接お話しすることはできなかったんですけど、Aの保護者とは何度かお話をさせてもらって、伝えさせてもらってます。それはこのケースだけじゃなくて、立場宣言をした生徒がいるときもこころがけるようにしています。

最後に、なんかやっぱり人と関わることを、関わりたくなって思える力をつけてもらえたらうれしいなっていうか、わりと班の学習を大事にしている学校があって、そのなかには班長がいて班の中の子のしんどさを班長の子たちがクラスの課題として考えてたりするような学校もあるので、そうやりながらいろんな子たちのしんどさを受け止めたりとか、そのなかで自分のしんどさを言えたりとか、経験をつんで人と関わることって楽しいとか関わっていきたくて思う力が身につけてくれてたらうれしいなと思います。

協力者 いろんな実践報告の中で「つながり」って言葉が出てくると思うんですけど、「つながる」

とか「つなげる」前にいろんな「つなげなかった」子たちが出てくると思うんですね。なんで「つなげなかった」のかとか、なんで「つながりたいと思わなかった」のか、そういうのを考えることはすごく大事だと思っていて、じゃあ「つながりたい」と思えるようになるためには我々はどうやって関わっていったらいいのかっていうのは考えていく必要があるのではないかと、そういうところが今おっしゃったところで重要なのかなと思います。

三重 先ほどから質問の種類がよく似ていて、いろいろ質問に答えていただく先生のお話を聞いていて、話を聞いてもらえる環境づくりがあってそこには先生方の姿勢、体制が見え隠れするというか、その辺を教えてもらえたなと思いました。自分たちも先輩によく言われたのは、「自主活動＝放任」じゃないんですよ、やっぱしかけていかなあかんねんで、それでいて最終的には子どもの力でやれるように、とか。日記とか生活をつづらせる中でも発表とかそれありきじゃなくて、この子に自分のことを整理さす、認めさせるためにやるんや、とか、しゃべった回数や人数で評価するんちゃうぞ、とか、それから、そういう中で個々に指導していこうと思ったらその子の状態にあわせて、ある子にはこれだけ書けたんやったらこれでいってみやとほめることもあれば、時にはあんたの書くことはこの程度のことじゃないとつきかえしてみるとか、さっき協力者の方もつなげなかった子どものことを考えなっていうことでは、意外と子どものことは子どもに聞かなあかんに全然聞かんと形だけで進めようとしてるとかそういう風なことを考えるうえで非常に参考にさせてもらえるなと思いました。三重でも高校なんかにいってる卒業生に話を聞くと、さっき松高が60校から来てる子らを受け止めてそういうオリエンテーションで確認とか共有をしてくれるって話がありましたが、よかれとおもって、高校の先生がいろんな子がきているし、人権学習に違いや温度差があるってことで平均したカリキュラム組んでくれることで、実はその平均したことはかなり積み重ねてやってきた子からすると、非常に頼りない心細いネタであったり、そしたらその平均的に易しくした内容が人権学習に慣れてなかった子にヒットするかといたらそれもヒットせえへんで、上にも下にもヒットせえへん状況のなかで、高校の人権ロングホームの状況を子どもたちの側から問題提起しているのを子どもたちから聞くんですけども今日の話聞かせてもらって高校の先生とけんかをせずに仲良くしながら相談していきたいなと思いました、ありがとうございました。

午前中 総括①

今回は報告が3本ということで、ゆっくりお互いの実践を報告しあえるということで、総括討論をはじめたいと思います。総括討論のなかで、3

人の報告に重ねて、という場合はそういう風に伝えてもらえればと思います。じゃあはじめていきなりたいと思います。

Kさん (ここで、脳性まひのKさんの発言があった。以下は言葉をすべて聞き取ることができずおまかな内容のみになる)

語り手として活動をしていて、「ともにいきる」「ありのままの自分で」ということを大切に活動している。その中でも悲しいこと(差別事象)があり、胸が張り裂けるほどのことでやめてしまおうとなったけれども、差別をするほうがだめだと思って今現在もがんばっています。以上です、ありがとうございました。

介助者 (隣にいた方にマイクが渡される) すみません、彼の言葉はわかりにくかったと思いますが、彼は何十年もふれあい活動として人権学習を子どもたちに教えてくれているKさんという方です。そのなかで、何十年前から小学校中学校いろんなところを回って、彼の生い立ちからいろんなことを教えてくれているんですが、二度の差別事象がある中で、彼がすごく悲しい思いをして胸が張り裂けそうになるということをお話いただきました。で、それでも…

協力者 申し訳ないですが…解説はしなくていいです。最初聞きにくかったけど、だんだんピンとあってきたん。重ねてあればまた発言してもらえればいいと思うので、ご自身の意見であれば言っていたきたいと思うんですけど、代弁するのは違うかなと思うんで。聞き取れなかった前半の部分は僕が後で聞きたいなと思います。他、ありますでしょうか。

滋賀 今の発言を聞いて切るべきではないんじゃないでしょうか。こう切ってしまうとほとんどの意見が通らないになってしまうと思います。いろんなことを考えてほしい。みなさんにとって特権とはなんですか、と聞かれたらどう答えますか?誰も今こたえてくれないですよ。こうすることで生徒も真似するんですよ。だから教師が見本をみせて変えていかなあかんと思います。一生懸命、今しゃべってくれました、でも中にはわからへん人もいます。そこに対して一生懸命説明をしようとしているのにそこで切ってしまったら何もわからないじゃないですか。この日本を変えていくのは自分たちです。自分自身も変えていかなあかんけど、それを伝える教師がそれを切ってしまうと何も変わらないんですよ。

協力者 ありがとうございます。少し説明をさせてもらおうと、誰かが発言をしたときに、それを聞き取れない自分がいるときにそれはその人から聞いたほうが良いとこれまで教わって僕は来ていて、僕はある会に行ったときに、発言をされて聞きにくかったんです。そういうのって長く聞いていくと聞こえやすくなってきて、なので協力者がそばに行き行って聞いたりしてたんです。けど、「ありのままの自分」ってある程度聞こえたと思うん

です。その思いを隣にいる方が解説しちゃうのは違うんじゃないかなと思いました。もしその言葉をもう一回聞きたかったら、もう一回発言してもらったりとかするのが大事で。もちろん一緒にいて「僕は彼をこういう風に見ている」というご自身のお話であれば、今共有する必要があると思います。けども、「彼は今、こういう風に言いました」となると、この自主活動の方向とはずれるかと思っていて、申し訳ないですが、止めさせてもらいました。ちょっと主旨を伝えて止めるべきだったんですけども、やはり真剣に聞くべきだと思っています。聞き取りにくいんですけども、それでもやっぱり聞くべきだと思っていて、そういうことで止めさせてもらいました。強引にうつたとしたら本当に申し訳ないです。

大阪 発言してもらったことがね、この3本の分科会、報告はすべて自分のことを語るっていうことがテーマになっていたかなと思います。それで、先ほど発言された方の声が僕も頑張って聞こうとしましたけど、僕はつかみきれなくて残念な思いをしました。その中で、ぼくも障害をもっているいろんな団体の方ともおつきあいあって、「わかった？」って言ったら、「ぼくらはわかんねん」って「毎日彼らと関わってるから何言ってるかだいたいわかったよ」って、そんなことかなと思います。ここの分科会じゃありませんけど、障害児教育のことを語られてるような分科会とかで大事にされていること違うかなと思います。その中で、今発言された方、今、総括討論のところですから、それぞれが思っている意見が出し合われてそれぞれの思いがぶつかりあって、自主活動の中での報告を通して僕たちがつかみ取って帰るといふ分科会だと思います。そういう意味では先ほど、発言されたとき、これはぼくの考えですけど、隣の人の解釈になったのかもわかりません。けれども、思いが、きちんと分科会の議題として交流しあう、意見の一つとして今の発言がここの中で落ちていかへんとやっぱりだめかなと思います。自主活動とそういうことは違うとおっしゃいましたけれども、これまたもって帰って、学校の中で障害をもっている子がどんなふうに使われているかということにもつながってくると思いますので、ぜひ、こういう場での合理的な配慮であったりとか、障害をもってる人がなかなか自分の言葉では伝えへんところ、伝えへんからこの討論に参加できひんねんやってことではなくて、ぼくらがどう合理的な配慮として彼の発言をこの場に落としていくんかってことを問われてるんだと思いました。

Kさん ぼくが、今、発言を聞いていた人たちは、人権を大切にしています。僕が自主活動の分科会に…今のは撤回します。撤回をお願いします。それで、いまお互いの人権をどう思うか質問しています。あなたに。どうですか。

協力者 そうですね。しゃべってもらってから、こういう主旨ですかと確認すればよかったかなと今思います。

Kさん お隣の方にも謝罪をしてほしいと思います。あとでもいいですのでお願いします。

協力者 はい、ありがとうございます。

マイク係 すいません、今のはKさんが協力者の方に隣の方にも謝罪をお願いしますと聞こえました。会場のみなさんにはどう聞こえたかわかりませんが、私にはそう聞こえたので、協力者の人答えてください。

協力者 ; 今、答えるつもりだったんですけど、全部聞いてから、もし解説だったら次からは結構ですと言うべきだったかなと思いました。

マイク係 すいません、私、自分の名前言うの忘れしました。滋賀県のKです。

協力者 いえ、ありがとうございます。あの…やっぱり、ちゃんと謝ります。ちょっと判断が早くて、こう、解説が始まっちゃうとやっぱりいやだなと思っていて、緊張感ない場にしたいかなと思ったんで、とめちゃいました。でも、判断としては、間違っていたと思います。申し訳ありませんでした。

Kさん この分科会の総括討論の……をめぐると……すべての差別を許さない…（おそらく冊子の分科会の討議の柱について語っておられる）とあったので、ぼくも、本分科会で…として勉強します。

協力者 そうですね。自主活動は、部落差別をはじめ、あらゆる差別を許さない主体者として生きる子どもたちの自主的な活動を支援し発展させていきたいと思います。すべてのことを勉強するところだと思います。ありがとうございます。進めていっていいですかね？ちょっと僕の判断が間違いで、お隣の人の発言を切ってしまったので、保証していいですか？

Uさん (マイクを通してないので発言が聞き取れない)

協力者 すみません、もうちょっと僕にも時間もらっていいですか。もうちょっとがんばりたいと思います。あの、全体としても私の判断も悪くて聞けないのは事実なので、全体としても共有したいと思っています。もうちょっとだけ時間をください。

(協力者がKさんの横に話を聞きに行く)

協力者 すいません、みんなの時間をもらって、今お話を聞いて、昨日の村上さんの報告を聞きたくてで、それはなんでかっていうと、タイトルのところにありのままの自分を知ってほしいというタイトルがあって、それは自分とつながるところなので、この報告を聞きたくて来て、この冊子に助けてもらってるんですけど、53Pのところにある自主活動のところのあらゆる差別を許さない主体者として、来てるいと。私自身が差別を許さない主体者なんだ、と今聞いてきました。

すみません、お時間いただいて、申し訳ないです。
大阪 今、司会の方がKさんの話を聞かれて説明されましたけども、それと最初に話したことを伝えたいと話してくれはった、どこが違うんですか？代弁するのはおかしいと言われてたと思います。今されたことは代弁じゃないんですか？最初のところで、木村さんが言ってくれましたよね？聞きたい、と。で、そういう意思表示をされたんですね、ということがあったと思います。あとで、話をする直前に、正確には覚えてないですけど、「説明しよか？」と何かおっしゃった。それから話をされた、そういうことが聞こえました。だから二人の間でそういうやりとりがあったうえで説明されたんだと思います。だから説明をされるってことはごくごく当たり前のことで、それを途中で切られたってことは、正しくない判断やっただと思います。それと、先ほどやりとりの中で協力者の方に聞いてください、っておっしゃいましたよね。あれは、私はこう理解しています。代弁する必要がないと協力者の方が言った。それがまだ生きてるのでそれをどうするかを協力者に聞いてくれと。協力者が説明が必要だと判断されるのかどうか、判断してくださいとおっしゃったと理解しています。で、今、かなりの力つかいはりましたけども、今、された判断も私は間違っていると思います。先ほどの協力者の方にとわれた主旨をもう一回聞いていただいて対応をお願いしたいと思います。

協力者 この後の時間でちゃんと整理をして、説明したいと思っています。すみません、私の体験の中で、非常に怒られた体験があって、隣の人に解説を求めて怒られた体験があって、すみません、ちょっとそれと勝手に重ねてしまって止めてしまいましたけども、そうではなくて、お二人の中でそういう会話があったというところも分かってなかったのが、大変判断としておかしかったと思います。申し訳ありませんでした。

大阪 すごく今のやりとりを聞いていて、もう私はあの方（Kさん）の始めの発言から「ともにいきる」「ともに学ぶ」とはっきり聞き取れて、次のところも協力者の方に、あなたも人間ですよね？という風に聞いてたところも聞き取れたんですよ。で、それに対して、はじめにばっさり切って次にいかれた。わたしは、トランスジェンダ一当事者なので、私も形は違えど障害者です。で、こういう風にばっさりいかれたことで、自分がカミングアウトしたときに私はマイノリティというだけで、自分の意見を封じ込められたのをフラッシュバックしてて、で、昨日は、協力者さんの発言で、自分は学んできたのは、差別を受けるときはマイノリティは一人だから鍛えてあげないといけないというような教えでこれまでできました、と最後に発言したのは、次の日につなげるためにちょっと挑発的なことを言ったのかなという解釈で私は見たんですけど、今のばっさり切っ

たので私は人権感覚を疑ってしまっていて、本当に差別の現実を見てきたのかなと、その現実から深く学べてるのかなというのを感じるんです。なんでそんなばっさり切ったかって、そんな体験があったうえでやと思いますけど、こういう全体の中でなんでそんなことが起こってしまっているのか私も理解できないです。こういう場だったらいろんな教員の方いらっしゃると思いますが、教員の中でもいろんなマイノリティの方がいて当然のことです。そういう方にも気遣うようなユニバーサルな発言をしないとおかしいと思うんですよ。で、なんでこんなマイノリティが前面に出ずっぱりみたいな形にならないといけないのか。マイノリティを鍛えるっていうような発言、今日もはじめの方に、作文は自分を鍛えるためとか、鍛えるっていうワードが出てきてましたけど、マジョリティが鍛えてあげる、鍛えてもらうマイノリティっていうのは差別を生み出す構造そのもので、鍛えるっていうワードについてすごい昨日考えて、朝の5時ぐらまで寝れなかったんですよ。そのたった一言で。鍛えるってワードで。その今のやりとりの間で、すごい不信感をもってしまっていて、そういうのが司会の仕事なんかになって思います。初めて私、全人教参加してるんで。なんでこんなにそこで切られたっていうので傷つく、それをもう一回聞きなおしに行くっていうので傷つく、なんでこんな中で人を傷つけるようなことが起こっている、この場で差別するようなことが起こっているのが本当に理解できないんです。なんでこんなこと起っちゃったんでしょう。

協力者 ええと、ごめんなさい、私がやっぱり過去に司会をやっていて、わからなくて、隣の人に説明してもらっていいですか、って激しく怒られて、それはとにかくしちやいけないんだっていう風にずっと思っていて、で先ほど説明してもらったんですけど、「説明しようか」ってやり取りがあったところも見逃してしまったんで。で、こう解説が始まっちゃったのかなって思って慌ててとめました。

大阪（ひとつ前の発言者） はい、そうですね、でも、そこをばっさりいくんじゃないで、そういうの続けていただいて大丈夫ですかね、って確認一言とるだけで、それだけでいけるじゃないですか。そういう感覚がにぶっていたらそういうことが起こると思うんですよ。

協力者 はい、そう思います。申し訳なかったと思っています。大変、司会をやりながら申し訳ありません。また後で考えたいと思います。発言をお願いします。

（以下、マイク通してないのでよく聞き取れず）

マイク係 すみません、この方を私も聞きたいので、いやな気持ちもあると思いますが、一言お願いします。（Kさんの隣の方に）

Uさん いえ、あの・・・（聞き取れない）

滋賀 今回、松高のすごい参考になる報告があり

ました。で、今のこの展開、人権の全国大会なのに、という形で聞かせていただきました。Kさん、移動のさいでも必死になって歩かれてるんだなというのを床の音で感じました。今、発言されてること、Kさん必死になってしゃべってくれてはります。私も必死になって聞きましたけど、聞き取れなかったです。申し訳ないです。で、お隣に来られている方がなぜ来られているか、ほとんどの方はわかっていると思います。そこをなんでくみ取れなかったのか、ということでここは協力者の方がきちっと謝罪をしてください。かつてということがあったかということは言い訳にしかならないと思います。そういう中で、女性の方も発言されました。これ以上、マイナスの意味で人びとの魂をゆさぶることは避けるべきだと思います。提案です。午後一時の開会につきまして、Kさんのお隣の方に私たちが聞きたかったことをお話しいただく形で進めていただけたらと、で、そういう進行で進めていただけるようにKさん、いっしょに来られた方、先ほどの女性に対してきちっと誠意をもって協力者の方が謝罪をしていただく。それで、私はお願いしたいと思っています。

協力者 ありがとうございます。司会なのに、このような状況になっていて、大変申し訳なく思っています。ちょっと二人とちゃんと話をして、過去のことでなく、なぜその瞬間に止めたのかっていうのをもう一回整理をしてお話をして午後一時から再開したいと思っています。

午後総括

協力者 それでは午後の総括討論をはじめたいと思います。その前に私の方でちょっと話をします。Kさんが発言をしてくださったのは、「差別事象や差別発言があって、そのことでつらい思いをしたんだけど、そのときに市内の小中学校の校長先生、教育委員会の方々が一緒にKさんと考えてくれて、子どもたちに指導してくださったと。そういう先生方に感謝している」という話をしてくださってました。それから、Uさんが発言したのは、私の方で見てなかったんですけども、発言を説明してくれないかとして、Uさんの方で「言おうか」と言ってくれた場面があったのにも関わらず、私の方で止め方も含めてよくなかったんですけども、解説するのは…っていうことで止めてしまいました。そのあと、KさんとUさんにうかがって、ここは全国大会でいろんな思いをもって集まっているんだから、本来はUさんを含めて本人から丁寧に聞いてほしい。なんだけど、いろんな話も聞きたいから、苦肉の策として、それで代弁をしようとしてくれたんですね。それをも止めてしまって、二重にしんどい思いをさせたかと思っています。ちょっと最後はKさんに、私はここに来るべきじゃなかったんですかと言われてしまったので、ここはKさんが来る場所です、と伝えています。で、発言をしてもらえます

か、って言ったらですね、「僕の発言はおみやげでもって帰ってほしいんですけども、みなさんの話もおみやげでもって帰りたいのでみなさんの発言がほしい」と言われました。その気持ちを尊重して進めていきたいと思います。よろしいでしょうか？再度、Kさん、Uさん、申し訳ありませんでした。では、はじめていきたいと思います、よろしく願います。

大阪 今日の報告を聞かせてもらうなかで、しんどい子ども、報告の中でのAの思いからはじめることが大事なんやなど改めて思いました。自分の学校でもしんどい思いをカミングアウトする子もいるんですけど、この子は自分のことを語ってよかったなって子のことを思い返してみると、このクラスの子には言いたいんだって言ってたことを思い返しました。言わなければいけないんだではなくて、やっぱり言いたいっていう風に思ったからそういう風に思ってるんやろなって思いました。Aの思いがあって、それを語るってのも自主活動なのかなと思いますし、そこからいろんな取組をしていくのも自主活動かと思うんですが、思いを受け止めて「あげる」んじゃないで、受け止めあえるっていうか、そういう環境だからこそそういう思いが出てくるんやろうし、思いから出発して自主活動をしていく主体がしんどい思いをしている人なのかもしれないし、そのまわりが主体なのかもしれないですし、みんなが動いていくって言うのが大事なんじゃないかななって実感しました。自分の学校に帰ってそういう思いで進めていきたいなと思いました。ありがとうございます。

Kさん はじめて、障害のある人を見たときどう思われましたか。かわいそうと思う人、挙手をお願いします。今の質問、わかりましたか？

協力者 少しわかりました。

Kさん どの辺までわかってくれましたか。

協力者 もう一回いいですか。

Kさん どの辺までわかってくれましたか。

協力者 つながりたいっていう気持ちが…え？ちがう？すみません

Kさん みなさん、初めて障害のある人を見たとき、どう思われましたか。

協力者 これ、僕が答えていいんですか？

Kさん みなさんに聞きますので、挙手をお願いします。

協力者 わかりました。全体でっていうことですね。問いかけもあるので返していけたらと思います。

Kさん あの、挙手をお願いします。かわいそうだと思われた人。

協力者 もし、よかったらそこから思いを語っても、初めて障害者を見たときかわいそうだと思った人、手をあげてもらっていいですか。はい、ありがとうございます。

Kさん 障害者もできることはいっぱいあります

ので、がんばっていたら声をかけてください。子どもたちに伝えてください。

協力者 ぜひ、Kさんの思いに返せる話があればと思うんですけども

徳島 今、発言いただいて、最初かわいそうと思ったひとはいないかという話だったんですけども、自分が思っていることなんですけど、私たち人間というものの思考回路の一つとして自分とは違うものに対して違和感を感じ、そして、最初の出会いによってあとの行動が変わってくる、こういうことが多々あるかと思います。で、その時に大切なはその人のことをしっかり聞いたり、その人と触れ合ったり、要するに自分の中でそういうことを多く経験することによって、自分が感じたものはなんだったのか、または、これからどう進むべきなのかを整理して考えるのではないかと思います。で、かわいそうだと思った人にとっては、最初、自分と違うもの、こういうものを見たときに自分の経験からかわいそうだと判断してしまう。じゃあ、それがどうして生まれたか。自分の生育だったりそれから、環境だったりこういうことに影響するのではないか。でも、大切なのはそれからどう考え、どう行動するか。人間として生きていく、そのなかで、どう出会い、どう感じ、これから自分をどう修正していくのか、そこを追求するのが大切なのではないかなと思っています。

三重 本日はすばらしい実践と、Kさんの話も聞かせていただいて、ここに来てよかったなと思っています。障害者とはじめて会ったときと、私の家族にも生まれたときから障害のある父がいましたので、家族がやっぱりしんどい思いをしてきている。でもそれはまわりの人に対する目があって、でも、家族もしんどい思いをしてきたものがあって、家の中もぐちゃぐちゃだったんですけど、自分自身のこともかわいそうだと思ってきました。どこまでが当事者かということもあるんですけど、あの実践の取組であるとか自分のしんどいことを語る教育を小中高校でやってきたら自分も違う考え方というか違う生き方ができてたのかなという風に思いました。自分はだれでも彼でも自分の父親のことを言っていたので、今思うと相手がどう思っていたのかなと思うんですけど、そうじゃなくて、たしか交流、取組の中で自分の立場を伝えてくってことは幸せなんじゃないかなって思いました。

香川 やっぱり教師集団の仲間っていうか、みんなやっていこうという気持ちって言うのがすごく伝わりました。ひとつになってひとつの実践報告を学校全体でやっていこうと、生徒がみんな幸せになってほしい、この学校でよかったって思えるようにと先生方が一生懸命つくってこられたものっていうところに感動しています。しかし、自分はどうかというと、どうしたらいいんだろう、なにかしなければと思いつつ、一人で立つこと

は難しいなとか、一人でもやろう、がんばろうという人が一人いたら学校は変わるんだろうな、その一人に自分もなりたいたいなと思っています。が、また戻るとまた埋もれてしまうのかな、それではいけないなと今葛藤しています。教師集団ががんばっていこうと肩をたたきあえる、そんな姿を見せていただいて、そんな集団が少しでも作れるように自分からいろんなお話をし、生徒のために、自分のために、先生のために、世界のためにがんばっていきたいなと思いました。

徳島 さきほど。Kさんにお話にいきました。昨日、この会場に入ったときに、私はいち早くKさんの姿が目に入りました。そして、うぬぼれなんですけど、絶対これは私たちの発表を聞きに来てくれたんだと自負してました。さきほど、村上の発表を聞きに来てくださったと聞いてうれしい気持ちでいっぱいでした。それで、今週全体学習をしましたが、内容はこういう本があります「じろじろみないで」九人のいろいろな個性をおもちの人の写真が本の中にのってあります。その写真をとりこんでプレゼンにしまして、二年生全員に見せました。やっぱり学校生活をしていますと、土日でも部活動をしていますし、街角でいろんな体験をするってことが本当に乏しいです。そこで、取り組みまして、一番最初に出会ったときにみんなはどこ見る？と聞きました。話は変わりますが、私は村上の発表でないと思っています。チーム阿波中学校の発表だと思っています。普段の授業も教室では担任がやりますし、全体学習は担任以外ももちろん前に立って授業をしています。で、子どもたちはとっっても衝撃だったって言うのが本音です。じゃあ、次に、とる行動、人間なんてまずは見ます。その次の行動が大変人を傷つけるっていうことを私は一番伝えたかったです。だから子どもたちと話し合う中で子どもたちの意見は今まで考えたことはなかったです。自分は何度も見たり、振り返ったりと平気でやってましたという気づきが多かったかと思っています。まずは、見るんだけど、その次に起こす行動は、その視線がいかに人を傷つけるかっていうことをみんな学習しました。で、また来週一時間もう一回論議をかわそうと思っています。そのあと、ハンセン病の学習に入ろうと思っています。3学期、革新的な授業をしようと思っています。私はこの会場でもみなさんとチームになっているような意見が交わればいいと思っています。

大阪 今のじろじろ見るっていう学習に関してですけど、そこで新たな気づきがあって、よかったなと思う反面、私も逆にじろじろ見られるよりも、目をそらされることがすごく多いんです。見るほうが、この人関心持ってくれてるのかなと思うこともあって、目をそらす人は関心持たないというよりも関わりたくないんやろうと感じてしまうような私もいるので、もし生徒からじろじろ見る以外に何かないかみたいなことが議論の中で出

てきたら、こんな意見もあると紹介していただけたらと思います。

協力者 すいません、あんまり前で、話さんほうがいいかなと思ながら、でも何かこの後のきっかけになればいいなと思って、午前中にもいろんな話があって自分の中でも解釈していくのに時間がかかったのですが、さまざまな背景のある子のことを考える中で、マイノリティの子たちがいつまでがんばらなあかんねんっていう話はよく聞きます。もちろん、例えば部落差別の問題は部落外の問題であるし、障害の問題はその人の問題ではなくて、社会にあるバリアが問題であって、マイノリティの人ががんばらないといけない疑問っていうものがある一方で、昨年この分科会で、ムラのおかあちゃんが、「頭の上に荷物をのせられたときに、自分でその荷物を下ろせる人になってほしい」というてんです。で、どうしたらその荷物を下ろせるになるかなと、その会が終わった後にずっと考えていて、で、鍛えるって言葉についてどうなんかという意見があって、つらい厳しさの中で鍛えられて下ろせるようになるというよりは、ともに下ろしてくれる仲間がいたりとか、ありのままを認めてくれる人がおったりとか、さっき言うた、目をそらさない、関係してくれる人がおったりとか、いうことで力をもらってようやく初めて自分で下ろそうかなと思えるようになるんちゃうかなと、今思いとして固まってきたものがあります。みなさんのご意見を聞いていて。マイノリティが荷物を下ろすという話の一方で、のせる側のマジョリティが、いわゆる社会の側、当事者の周りの子たちが、かわいそうで終わってしまへんような出会いをどうやって僕らが作っていかなあかんのかっていうことがすごく大事で、そういう出会いが報告していただいた中に、こういう出会いがあった、同じ思いをもつ仲間、取り組んでおられる先輩との出会いがあったとか、そういう活動を、出会いをどうやっていくかという話ができたらいいのかな、と。で、作ってきた活動の中で我々が子どもから何を学んできたか、どう学んでいくべきなのかということが共有できれば、それぞれの現場にもどって、それをもとに実践を紡いでいけるのかなと思えました。みなさんの発言が僕の中でいろいろとまとまってつながって行って、出会いを作るための活動をどう考えていくべきかというところにつながっていったので、ぜひいろんな方のこれまでのいろんな経験であったりとか、うまくいかなかったけれども、これはやはりこうなんではないかということが共有出来たらすてきだなと思いますのでよろしくお願ひします。

三重 今の協力者の話を聞いていて思い出したことも含めてなんですけども、私は滋賀県の隣接の伊賀市っていうところなんですけども、三重県の県人教の大会が先日行われたんですけども、その地元特別報告っていうのが伊賀市の高校生や青年

が部落問題をテーマにステージに上がったんですね。企画としては高校生と青年のみが出演する大会でした。その中で当然それをつくっていくスタッフも青年がやってたんですけども、その中で部落問題に関わって、17歳は17歳なりに、24歳は24歳なりに日ごろ自分が思っている悩みとか不安とか、あるいは被差別の体験とか出しながら、生活が厳しい中、地元の人権センターが第2のふるさとやったっていうことを話していく子もあったわけなんですけども、その中で監督というか青年たちがもう一つ仕組んだことがあって、そのいろんな地域の青年が登場するなかで、そのステージの最初と最後、前のきっかけと後の結びにいわゆる地区外の子たちの仲間が登場するんです。だからストーリーは最初、彼らが部落問題をなくそうっていうけども部落問題をじぶんごとって考えるのってどうことなんやろって問題提起からはじまって、会場のみなさん、この答えを一緒に探してくれませんかという問いかけでなかなかまだ断ち切れてないんちゃうやろかという話をしていく中で、そして当該者のいろんな経験や語りがあって、結びにはやっぱり今日議論しているように、その子だけに背負わず話じゃない、がんばらず話じゃないって言う風に考えていく中で、する側、される側じゃなくて、自分たちも差別をなくす当事者になっていきたいっていう結びをしていくんです。これは、この言葉に酔ったらあかんんですけど、子どもたちがこの言葉にこめた意味があって参加者は多くが大人なんですけども当然こういう高校生、青年の出演するステージにおいてあれだけのことを話せるなんてすごいってエールもおくれる。それはその子たちにとっては力につながっていく話なんですけども、さっきから議論されてるように角度をかえると、よくよく考えるとちょっと待てよと、こんなことを高校生や青年に言わせてるだけの大人でいいんかっていうやはりグルグルとブーメランのようにこっちに戻ってくる話なんです。で、そのことをやっぱり大事にせなあかんっていうことは、言ってます。今日、報告いただいたみなさんの発信もそうだったろうし、フロアのみなさんのふれたあたりもそのことにつながるのかなと、今協力者の言ってくれたことに重ねてマイクを持たせてもらいました。

大阪 報告していただいた3名の方に今、休憩はさんですかね、日々私自身が性的マイノリティの当事者ということで去年からいろんな学校さんの職員研修に呼ばれたり小中高それぞれの生徒さんの前で話す機会をいただいたり、こういうことをせなあかんっていうのは、困ってる子がおるから、でも私がいってもそれっきりで終わるわけで、そのあとのフォローは学校の方がもちろんしていかないとはいけませんし、小学校の後は中学校が、中学校のあとは高校、高校のあとには社会につながっていくわけで、私がつねに考えてい

るのは学校だけが安心安全な場所でいいんかなっていうのはすごい考えるんです。特に昨日の中学校さんの報告で発達障害のことを生徒だけじゃなくて保護者も前にして、感動する、それはそれでいいと思うんですよ、でもそれが一過性で終わってないかなってというのがすごい、昨日の発表を聞いてて怖くなって、そのあとの高校にどうつなげていくんやろう、社会にどうつなげていくんやろうって、そこまで考えたうえでああいう取組をなさってるのかなってというのが、私自身の経験からすごい怖いなっていう風に感じているので、社会に対して学校が当事者を前に立たせること、そういう風に社会につながるために日々心掛けてることとかあったらヒントとして聞かせていただきたいなと思いますので、時間があとになるかもしれませんが教えていただけたらと思います。

協力者 もしすぐ返せるようだったら…まあまだ1時間ありますのでどっかで発言してもらえたらっていう風に思います。ではいったん休憩に入ります。

午後総括後半

協力者 先ほど報告者の方にどう思うかって問いかけがあったのでまずはそこに答えてもらってからはじめていこうと思ってるんですけども。小林さんから。

報告者 (小林さん) 今年の夏、野洲市の人権教育研究大会がありまして、その時の記念講演、今までは部落問題であったりとか、在日の問題とかそういう問題で講師の先生呼んでお話ししてて、今年はじめてLGBTの先生に来ていただいてお話を聞きました。学校現場は正直あまりにも知らなすぎているっていうのがほんまやと思います。私自身が一年前に地域の中の学習会で滋賀県で当事者の方に来ていただいてお話を聞きました。聞く話聞く話が始めての話で、なんでそこまで自分のしんどい思いをそこまで出してくれるんやろって、興味本位じゃないし、そこまでしゃべれる話じゃないと思うんです。で、いわはったんが、やっぱり知ってほしいって、で、先生とかおとなが知って子どもに正しいことを伝えてほしいということを、そういう思いのなかでしゃべってるっていつてくれました。で、学校にもいるよって、クラスに二人か三人は絶対いてるって。いう話が自分自身が衝撃的であまりにも知らなかったなって。で、まず野洲市のほとんどの教員が参加してるので、その話を受けて自分の目の前にいる子どもたち、ほんまにしんどい思いしてないやろかって、そこから点検していくことが大事やし、まずは正しいことをきちんと知っていくことで教えていくっていう風にせんかったらあかんよないうことで、学校の中ではそこを中心に子どもたちにどう教えていくかもあるんやけど、環境をきちんと整えよう、と。トイレであったり更衣室であったり、今まで見過ごしてたその部分、ど

の子も安心して安全な学校にするために、トイレ行くのがしんどいねんとか、男の子と着替えるのがしんどいねんとなかなか声をあげられへん子もいっぱいいてるやろって、そこに気づける人権感覚を磨いていかんとなんとなく大勢で見過ごして、運動会やからはよ着替えて教室で着替えさせてる、その状況で学校いきにくくなって子いひんやろかって、その部分をしっかり見ていくこと、気づかされたことがいっぱいあって、今そういうプログラムというか、まず指導する側がきちんと正しく知っていくことで考えていこうと取組をやっています。それから当事者が…という部分で言うと、昨日うちでやってる文化の集いなんですけどお、なんで12歳の子がマイクもって、いっしょに差別なくしていく仲間になってくださいって、ステージにたつて訴えなあかんのやろって毎年思うんです。6歳7歳の子が解放子ども会の歌を歌って差別なくす仲間つくるっていつまで歌わなあかんねやろ、いつまでスポットライトあびて会場にむけて歌わなあかんねやろって思うとほんまに切ないとか情けないとか、思います。親は親で自分の思いを言っていくって、いつまで言っただなあかんねやろって、言わなわかってもらわれへんねやろかって、ほんまは差別している側が、自分は世間体にしばられて差別していますってしゃべってくれたらそのほうが話早いんちゃうかって。俺はこんな気持ちで噂話信じて差別やってんねんってそんな話をしたほうが早いんちゃうかっていつも思うときがある。でも言わはるのは、「でも、うちらが今言っただあかんかったらわかってもらえへんし、社会変えられへんやん」って「だからしんどくても言ってるねん」って保護者は言ってくれます。で、ほんまにしんどい思いの中言ってくればったり、子どもも聞くんです。で、子どもはうれしいから立つ子はいっぱいいるんですけど、でもなんか10歳の子がマイク握って一人で会場にむかって差別なくす仲間になってくださいって言わすのって、ほんまにどうなんやろって、差別は差別する側の問題やとしたら、それってこの子らに言わせたらおかしいやんって、やっぱり周りのおとなが気づいていって社会を変えていく、そういう仲間になっていくことがすごく大事なやろなって思ってます。で、そんな中で、一番最初にも言いましたLGBTとか学校のシステムを変えていかないと、心がけの問題にしてしまったらいつまでもなくならないと思うんです。かわいそうやから、とか、差別はいけない、とか優しさとか心がけの問題にしてしまうと、いつまでもなくなれへんと思う。だからシステムとして学校や社会のシステムを変えていくような動きをつくっていくために当事者の思いとかそういう部分を聞かないとわかれへんこととかいっぱいあると思うので、社会システムとして変えていく部分、まずは身近な学校から、でおうち帰って子

どもらが家庭へとかそういう広がりっていうか、そういう部分でしていくことが大事なんかなって思います。当事者いつまでがんばらあかんねやろって、ほんまにその通りやと思いがながら、でも現実厳しい差別がある中を生き抜いていかなあかんっていうこの中でやっぱり力をつけていかなあかん部分と周りに発信していかなあかん部分とありながら取り組んでいるのが現状です。

報告者 私も人権学習をしていくときに、どういふ部落問題にしても障害者の方の問題にしても、いつも念頭に置いてるのは、私のクラスの中にそういう当事者として、この学習をしてつらい思いをしてないだろうかっていうことをいつも念頭において授業していかないといけないっていうのは思いながらしています。私の当事者に対する思い、私が中学生の時なんですけど、人権意見発表会ではいつも友だちが涙ながら立場宣言をしておりました。それを聞いて友だちのことですから感極まって共に涙を流すとか、で、差別なくするためにがんばっていかなあかんっていう思いは、ここまでぐらいしか考えられてなかったんですけど、やっぱり教員の立場になってAも自分のことを語るんですけど、やはり支えられる仲間がいないと、わたしは個人的に思うのは積極的に教員の方からとか、その場の雰囲気でもりあがって自分のことを伝える、でも仲間がいなかったらその場でいいっぱなしになってしまうのは、頑張った子の勇気を台無しにしてしまうのではないかなと思います。やっぱりまわりが支えられる雰囲気、仲間づくりができてないと、なかなか自分のことを語る、思いがあってもそこまで頑張ってもらわなくてもいいのかなと思ってます。がんばればがんばれって言うことも大事ですがまわりの集団、なかま、社会が変わっていかなくてはいけないんだらうと個人的には思っています。Aも中学校で語ったわけですが、社会に出ていったときにつらい思いをすることがあるかもしれません、その時に地元、Aといっしょに広がった仲間たちのところへ帰ってこられる、居場所を作ることも中学生の中で大事ではないかと思っています。で、社会につなげていくために保護者の方はちいさな社会なんですけど、我々が日々生徒とともに学んでいることを伝えて、保護者の方から少しずつでも社会に発信して、社会が当事者の方を含む周りの環境を少しずつでも変わっていったら多くの方が生活しやすいような社会が実現していけるのではないかなと思っています。私は、どうか社会というか一人一人の人間がもっている優しさとか思いやりっていう部分をはぐくんでいけたらと思います。それをあきらめず大事にしていくって思っています。そうすればAを含め当事者の方もきっとこう、こういうことを気にしなくていいような社会が実現していくんじゃないかって思っています。

報告者 (木村) ずっとお話を聞かせてもらってて、

僕自身、当事者だけが、いつまでがんばらあかんねんっていう風に思ってことなかったなって思ってたんですけど、なんでそんな風に思わなかったのかと思うと、ひとつはさっき報告させてもらった生徒もそうですし、みんな言ったあといひ顔してるんですよ。すごく自身に満ち溢れていて。だからその時に当事者だけががんばってるって思わなくて、なんでやろって考えてたら、やっぱりそのことを受け止めた仲間の力やなって思ってるんです。はっきり言って当事者のことを自分のことを言ってくれた時に問われているのはその子じゃなくて、それを聞いている側というか、だからこそ、そのあとにその子たちがどう行動していくんかっていうのを僕らはしっかり見とかなあかんって言うのをさっきの話を聞いててすごく思いました。さっきの生活保護のことをいった子たちがそのあと行動していったときに、全然違うグループの子たちが賛同していたっていうのもそうですし、もうひとつ例をあげると、本校では人権の集いっていう大きな場があるんですけども、そういう全校生徒の前で自分の立場を言う場面があるんですけども、その立場宣言をしたあとに聞いてた子たちが立場宣言をした子が一回自分の親来てほしいって言ったんですね。めっちゃあったかいところやねんって。そのあとに人権の実行委員の子たちが集まって、一回フィールドワーク行きたいわって言ってくれたんです。なんかそういう生徒らの熱を一つは見逃せへんことちがうかなって僕らの仕事は。で、まわりがどう動いていくかっていうこともきちっと見ていくことが当事者だけをがんばらせへんことにつながるんちがうかなって、今聞きながら思っていました。

奈良 今日朝から参加しています。この3本のレポートは事前に読ませていただいて、自分を語るって言うのが中心というテーマで、やっておられるんだなって思いました。うちの学校の方でも教員自身が自分のことを語ることから学級開きを始めていく取組、それから子どもたちが思いを出して行くっていう取組、自分を語るってことを大切にしている学校です。もちろん語られへん子ももちろんいるし、語ることが目的でやってるわけではありません。やっぱり語るってことになると、まず自分のことをしっかり見つめるってことにつながっていくんだらうって思っています。全同教が結成以来ずっと「差別の現実に深く学ぶ」ってことを取組のスタートにしようって言うてる、そのことの意義みたいなことがうちの学校では毎年毎年きちんと確認してやっていかなあかんっていうこと、そこからなしに自分が差別の現実、生活現実や、自分自身がどんなところに立っているのか、子どもたちがどんな生活を抱えて学校に来ているのか、子どもたちがお互いに自分たちの思いつらいことも悲しいこともお互いが知り合うことから取組をはじめていく。せやないと、

上に何乗せてもほんまにありきたり、深いつながりになっていかへん。教育もほんまに信頼に裏打ちされた取組ができていかへんのちがうかな。教師が自分のことを一時間かけて生い立ちから、どんな出会いの中で、今どう思いながら君たちにこんな風になってほしいっていうことを語ります。それを受けて子どもたちはこんな風に生きてきて、今どんなとこに立ってるねんやろうっていうことを考えながら、綴っていきます。そんなことを交流する場面っていうのを作っていくんですけども、僕は語ることの一つの意味は、そうやって自分の生活をしっかり見ていくことが一つだと思っています。それと、語ること自体は仲間との出会い直しをしていく、仲間がこんなところにいるたんやな、こんな生活の中でやってたんやな、学校生活の中でこんな思いをもって毎日学校へ来ていたのかっていうことに気づいていくっていうこと。先ほど松原高校の中で生活保護の話が出ていて、「俺、そんなんもらうんやったら死んだほうがましや」って言うていた子ども、生活保護が自分の問題ってなつてなかつた子どもが、仲間がこんな思いしてやってんねやつてなつた瞬間に生活保護の課題が仲間の課題と結びつくんやと思うんですね。これまで他人事であったものが自分のところにぐっと落ちていく。ぽつんと差別や人権課題が自分の心に落ちていく。そして、自分が差別していたっていうことがめくられていく瞬間になっていくんだらうって思います。そんなことで子どもたちは自分の中の人権課題をどんどんどんどん…やっぱそれは、仲間とのつながりやと思うんですね。僕は障害を持つてる人がこの会場の中から排除されたって感じたんですね。差別が目の前でぽつと起きてる、その時に僕はこれまで出会ってつながってきた生徒の顔がぽつとつかんで、こいつもそうなるのか、そんなことはあかんって、何言うていいかわからへんけど手をあげたんですね。そういうことだと思うんですね。自分の隣の子が、つながる仲間が世の中で起きてることとパツとつながるそんなように思いました。そんな子どもを育てたいなってことで、僕らはそんな意味で語るってことを大事にしていく。で、さっきおっしゃいましたけど、言うた子が言った後、ほんまに自信に満ちて言うてよかったって、そうなんです。一番聞いてほしいことは一番言いにくいこと、こんなフレーズは人権教育や同和教育のなかでずっと語り継がれてきましたがそれは真実であると思います。一番言いにくいけど、でもそこわかってくれんと僕とあなたは連帯できひんやんか、本当の仲間になろうよ、だからここ言いたいねんけど、これが一番言いにくいねん、そのところを教師がどうつきあって言うていくのか。僕は言えなくてもいいと思っています。うちの学校で生徒会が大事にしてる看板があります。そこには第四者って看板がはってあります。そこには差別するもの、

されるもの、自分とかかわりのないと思うもの、第四者は差別をなくしていく者としてともに進もうっていうのがあります。学校には障害のある子、うちの学校には部落出身の子、LGBTの子、在日の子、被差別のマイノリティと言われる子たちがたくさんいます。そんな子たち本当のところであつてつながるなかで、子どもたちはかわっていくんだらう、差別を許さないもの、自分は部落出身でもない、障害もない、でも僕は差別をなくすものとして闘っていくんだ、生きていくんだ、声をあげていくんだ、そんな子どもたちを育てていきたいなって思っています。僕は中学校現場で、小中学校は義務制、高校なんかでも90%いきますから、うれしいことがあつてね、そうやって子どもたちを分けない原学級保障、100%原学級で障害児が暮らすっていうのをやっています。3年間クラスになかなか自分の思いを出せない自閉症の男の子がいて、その子といろんなことがありました。3年間取り組んで卒業させました。卒業前に10月ごろですけども、生徒会入れ替え選挙があつて、生徒会長が最後、任期終わるけど来年からがんばってやつていうところがあつてね、生徒会長がこう言いやつたんですね、障害を持つてる子と9年間一緒にいて教えてもらったことがある。僕は彼といっしょに生活してきただけやけど、彼に教えてもうた。僕は一生障害者差別をしない56人になりましたっていうのを彼は退任のあいさつで言つたんですね。聞いていて、おっ、そういうことかと思つたんですね。義務教育で9年間、うちの取組でこんな取組ができて、9年間の中で、障害者差別なんか僕らせえへん子になつたでつて言えたら、それが奈良県の河合一中でも二中でも奈良市の学校でも栗東市の学校でもどこでもそんなことがあつたらね、障害者差別なんかあつという間になくなりますよ、一世代で。僕らはそんな可能性っていうか教育が世の中変えていくんだっていうダイナミズムを感じながらやつてる、そこに教育のおもしろさがあるんちがうかなつて、だから差別をなくす、教育者ですからそれだけが仕事じゃないですけども、僕は差別をなくす一人の人間として子どもたちとともに向き合つていきたいなって思いました。

大阪 うちの家族は全員が松原高校の出身で、私の夫が被差別部落の出身なんです。で、私自身は他地区で育つて、松原の人権教育に育てられた一人なんです。で、高校で被差別部落の仲間や障害のある仲間と出会つて、私自身が自分の生活と向き合えてなくて、自己開示とかそれはとても恥ずかしいこととか思つていたのが人権教育によって、そういうことじゃないよつて。私自身も聞いてほしいのは自分のしんどい生活のことやつたし、そういうことを教えてもらいました。で、その中で主人と出会つて、その中で私の家族からの結婚差別があつたりとかあつたんですが、支えてくれる先生や仲間がいてたので結婚することも

できたし、今はムラのおばちゃんとして、学校では事務職員として今は高校生や青年の活動の支援をしています。で、やっぱり大きな社会に出たときに、立場をもった人間が自分のことを言えなかったりとかくやしい思いをしたときに、そういう思いを共有できる仲間や居場所を大切にしたいなと思っていて、松原高校の先生にはとても協力していただいて続けられています。中学生は夏に合宿をしてるんですけども、そこで部落問題や先輩の話を聞いたりして、自分のことをしっかり見つめていく合宿なんです。その合宿を支えるためにご飯炊きおばちゃんとして参加しています。で、やっぱりそういう人とのつながりはとても大事ですし、教育の場ではこんな子に育ててほしい、こんな力をつけてほしいって先生方が思ってくれることでいろんな出会いを作れる場だと思うんです。本当に保護者としては切に願いたいところなんです。私自身は自分が事務職員として小学校の方で何ができるのかっていうと、私たちは職員室にいてることが多いので、一番に電話をとることが多くて、いつも欠席が続いてる子がわかったり、おかあさんが困って電話してきたり、そういうことがあって、その時に「おかあさん今日どうしたん？」って、その時の様子をまた担任につなぐとかいうことで子どもを守る一員としてやっていきたいと思っています。

大阪 障害のある方との出会いでぐるぐる考えていて、幼稚園のときによくおもしろい子がいて、後から考えると、もしかしたらそうだったかなって思ったり、小学校1年生のときに「あ」しか話さない友だちがいて、いやなことがあったらつばはいてにげるっていうおもしろい友だちがいたんですけど、その子が障害があったかどうか認識もされないうちからいっしょに過ごしてきたなって思っています。で、その友だちが障害があると気づき始めたのがだんだん自分が進路を考え始めたときに「あの子はどこ行くんやろう」って、ちがう中学校やから漏れ聞く情報しかなかったんですけど、もしかしたら作業所しかいくなかないかなって思ったりとか、中学校の時は車いすの友だちとかいたんですけど、その子は受験していったけど、私の進学した高校には車いすの子はいなくて、なんでおれへんのかなって思ったりとか。自分の小さい時って本当に恵まれた環境で育ってきたなって今になって思います。高校の時にまた思ったのが、支援学級の存在を初めて知って、そんな風に分けられてたんかって悲しくなりました。自分が教師になってそのことの出会いがインパクトがあったので大事にしていきたいなって、でもなかなか自分のなかでレポート読ませてもらって、転勤した同僚のお姉ちゃんが障害があって、その人は中学校までは「〇〇の弟やろ」って言われるのがすごいややったって、言っってはって。高校になって姉の存在を知られない、だけどそれって自分の気持ちに蓋して生きてきた

んやってことがだんだんわかってきました、って。自分も障害のある弟のお兄ちゃんのことを担任してて、どう思っせんねんやろって、そこに踏み込めなかった10年前の私がいって、今はそれじゃだめだなって思っています。決意宣言じゃないんですけど、今年4年生で担任じゃないんですけど、学年に関わることがあって、車いすにのって脳性麻痺と一般的に言われる子どもと関わってるんですけども、その子とどうやって人権学習していこうかと学年で話をしているときに、やっぱりその子が自分のことをどう思っているのかなっていうことを私はその子に聞きたいなって思っています。その子が3年生の時に文字盤で「しょうがいいや」って言ったことがあるっていうのは聞いたけど、そのあと聞いてみたけど深く出てこなかったそうです。なので、今年は人とのであいの力も借りながらその子自身が自分のことをどう考えてるのか周りの子がどう考えていくのか、で、自分とどう重ねていくのかっていうのを取り組んでいきたいなって思っています。その子自身も自分の存在は否定してほしくないともちろん思ってるし、あるがままを受け止めてほしいし、自分のことを認めてほしいなって思ってるんですけど、それってまわりがどう思ってるかってことがすごく関わってくるんだなって思います。周りの子もそんなことを考えると小学校の時の自分と重ねて考えると、あまりにも当たり前すぎて立ち止まってない可能性があるなって思うときがあります。なので、周りのこともいっしょに立ち止まって考えながら進めていこうと思ってるんですけども、周りの子も改めてどう考えるのかってとこも含めて周りの子自身が自分はどうなのかって振り返れるように取組を作りたいと今日のお話を聞いて思いました。

滋賀 今年赴任した学校なのでなかなか前に進まない苛立ちもありながら今日の実践を聞かせていただいて勇気と元気をもらいました。で、たとえば教室に入れないう子が学年だけでも5人ぐらいいます。4月から入りにくかった子、途中から学級の仲間の目線が痛くて入れなかった子、それから、ずっとじっとしてられない、入ろうと思うんだけど、1分、2分したら、また出ちゃう子。そういう子たちと関わる中で、どうしてそういう風になってるんかという現実をその子たちと話しながら聞くという営みをまだやってるところで、そっからクラスの仲間に発信するとかそんなところまでいけてない、こんな状態です。ですが、1分ぐらいしか入れへん子と関わっていく中で、たとえば人のいない美術室やったら一緒に作品作れるかって言ったらいっしょに作れるって言ってくれるし、ぼくの空いている時間にいっしょに作る取組をしてたら、よく考えたら君、クラスの子のスピードと追い付いてて同じことやってるよって言ったら、自分の場所には座れないんですけど、ぼくの前の机に座って製作してくれる

みたいな状態があって、どうなのか、おおげさなところまではいけてないんですけど、こつこつとでもやらんと、ぼくらの姿勢は子どもには見えてこないんだと思ってます。少なくとも、教師がどの生徒にどういう関わりをしているのかは見えてはいるはずだと思ってるので、そこからスタートしていかなと思っていまやっている最中です。そういうことが見えてきたら、もうちょっとしんどい状況にある子もしゃべってくれるかなと思って、そういう思いをどうつなげたり、広げたりしていくことを組み立てていくかはこれからの課題だと思いつつですけども、今日先生方の話を聞きながら元気もらえたなと思っています。

滋賀 小林先生がいてくれる野洲小のある部落に住んでいます。うちの子どもたちは子ども会や少年団の活動の中で、いろんなことを勉強してきました。差別のことを学んだり、自分の地域がどういう地域であるのかということ学んだりしていきながら成長してきました。たぶん子どもたちの中にはまだ幼かったころにはわけわからへんなと思いつつたかもしれへんけど、やっぱり勉強を積み重ねていくことで、自分の立ち位置を知ったりとか、文化の集いの中で発信していく力というのを仲間がいたからやってこれたのかなと思います。私自身も文化の集いで親の思いとしていろんなことをステージの上でしゃべってきました。最初はなかなかうまくしゃべれなくて、ですが、やっぱりしゃべらんと自分の思いは伝わらんと思ったし、いっしょにステージにあがってるおかあちゃん同士のなかまがいたりとか、文化の集いには部落解放をめざすために人権のことをいっしょうけんめい考えようとしてる人たちが集まってくれてるので、この中でやったら言えるかもしれん、とか、こんなか言ったら私の言葉を受け止めてくれる人がいるかもしれんということしゃべってきたのかもしれないと思います。で、ここの全人教の中でもしゃべれるのは、やっぱりこのなかでしゃべってもわかってもらえるからしゃべれるのかなと、そういう風に思います。さっきも自分が差別を受けてきたこと、私は部落外に生まれ育って、結婚をして部落に入りました。なので、はじめは差別のこと、部落のことなんにも知りませんでした。でも、子どもを育てていく中で、子どもたちが差別のことを一生懸命学んでいるのに自分がなんにも知らんではあかんと思いつつながら子供が学ぶのと同じように一生懸命学んできました。でも、地域のおかあちゃんに子どもと一緒に学んでては遅いでって、子どもが差別に出会ってくじけそうなとき、親として支えられへんでって、親はもう一歩先を歩いて、子どもがつまずきそうになった時、一緒に支えてあげなあかんねんで、って言われたこともありました。いま、うちの子はAの世代よりも大きいので、私はAのお母さんよりは上の世代になります

けれども、やっぱり自分たちが経験したことを次の世代のおかあちゃんたちにつないだり、次の世代の子どもたちにつないでいきたいなという風にも思っています。うちの子は成人して大きいです。いろんなことを学んできてくれましたが、これから結婚という部分での不安もあります。結婚差別まだまだあるし、うちの子がそういうときに出会ったときにどうなるかなという不安は抱えています。でも、今まで学んできたことが結婚の時も乗り越えていけばいいなと思っています。野洲では30年以上も前に大きな差別事件がありました。それは学校現場でありました。で、子どもたちが命を脅かされたり、親も我が子の命を守ろうと必死になったり、そういう取組がありました。その中で、当時中学生だった子どもたちが差別をなくす仲間を作っていく、この中学校には絶対差別はおかしいって言うてくれる仲間がいるはずや、その仲間を増やしたいということで、立場宣言していきました。すごく私はその姿に学ばされました。その当時立ち上がっていた子ですが、高校に行ったときに、やっぱり自分の部落のこといえへんとか、仕事に就いたときに地域のことなかなか言えへんとか、なんで中学校の時あんだげが言えへんって言えてきたやんって、でも社会に出たら言えへんねんってゆう風な言葉を聞いたことがあります。その子が今おとなになって、子育てをして親世代になっています。で、その子たちはやっぱり自分の経験の中で命を脅かされてきたそういう現実があって、今は差別なくなってきたしそんなことないでって、その保護者に言えるでしょうか、やっぱり今も差別によって命をおびやかされるようなことって起こってくるんちがうかなって思いは抱いてるし、そういうことがないようにと思いつつ活動してきているけども、その思いは今もまだあるんやってことを知ってほしいなって思いました。今、地域の中で文化の集いって一生懸命やってきてるけども、ほんまは何年後かにはこんなせんでも差別がなくなっていたらいいなと思うし、差別がなくなると言うことせんでもええやんってなったら、人権を大切にするためにみんながつながっていこうやうな集い、今もそうやけど、そのことを大きく謳っていき集いになっていったらいいなと思うし、そういう意味でもつながりがどんどんどんどん広がってほしいなっていう風に思っています。